

「ウイズ・ユー」を読んで

庭窪中学校 三年 轟田 小春

側にいる大切な、かけがえのない人が抱えきれない悩みを背負ったとき、私には何ができるだろうか。そんなことを考えさせられる物語だった。

この話は優秀な兄と比べられることで、自分自身へ劣等感を抱いてしまった中学三年生の悠人と、中学二年生でありながら病気の母親の介護を担い、日々家事をこなす「ヤングケアラー」の朱音を中心として進んでいく。また、作中にはその二人に関わる沢山の人々が登場し、どの登場人物も辛い思いをしてきた過去や悩みを抱えているのだった。そんな周囲の人の影響を受けながら、受験勉強や家族との向き合い方、恋愛など様々な経験を経て互いに成長し合い、前を向いていく2人を描いた作品である。

私はこの作品において強く心に残った言葉が一つある。それは、朱音が風の強い日に輝く星について語った言葉だ。「こんな日は、星がうたう。小さな小さな、オルゴールの音色。ささやくような。じつと耳をすまさないで、きこえない。」私はこの言葉が朱音の心の中を表した言葉なのではないかと思った。大きな声で助けを求めることはできないけれ

ど、誰かがこの状況から救い出してくれるのではないかと、期待している。しかし、その

声はじつと耳をすまさないで、聞くことはできないのだ。私がこの言葉をこう解釈したのには理由がある。それは、私の実体験からだ。少し前の私には沢山の小さな悩みがあった。一つ一つの悩みだけを見ればほんのささいな事ばかりで、少し頭をひねれば解決できる問題だったと思う。しかし、当時の私にはそれだけ沢山の問題と向き合う心の余裕がなく、一時は、自分は最悪の境遇に置かれているのだとさえ思った。そして、そんな状態になっているときこそ、気軽な気持ちで相談をした。助けを求めたりすることができなくなるのだ。私にもこのような経験があるように、この言葉はきつと朱音だけに当てはまるものではないだろう。人間は、ときに自分の心に正直であることができなくなるのだ。辛くても「大丈夫」と笑ってみせたり、差し延べられた手を素直に受け入れることができなくなったりする。そんな、正直に自分の気持ちを表せなくなった大切な人を、どうすれば救うことができるのだろうか。それはきつと、ただ側にいてあげることなのだと思う。実際、私が先に記したような状態から抜け出すことができたのは、ただ側にいて、私を認めてく

れる存在がいたからだだった。

この本のタイトルの「ウイズ・ユー」は日本語に訳すと「あなたとともに」という意味になる。このタイトルには朱音がお母さん、悠人のお母さんが息子達を、朱音と悠人がお互いを思い合うような様々な、大切な人に寄り添う気持ちが描かれているのだと思う。

きつと、人はみんなそれぞれに悩みの種を抱えている。その種が根を生やし、心をぐるぐるに締めつけられてしまうことは、だれにとっても起こり得ることなのだろう。そんな時、支えになるのは側にいてくれる大切な人の存在だ。言葉を交わすことがなくても、ただ寄り添ってくれるだけで勇気がもらえる、そんな存在。私も側にいてくれる人がいたことで、救われたうちの一人である。だから、私は大切な人が抱えきれない悩みを背負ってしまったときに、隣で寄り添い、勇気を与えてあげられるような人になりたいと思う。でも私は、まだ子どもだ。大人と比べて、悩んでいる人に直接してあげられることは少ないだろう。作中でも「ヤングケアラー」である朱音の環境を本質的に変えたのは、悠人ではなく悠人のお母さんだった。しかし、私は朱音にとつての悠人がそうだったように、ただ側にいて支えてあげられることはできる。自分の

悩みを、思いを、話したいと感じてくれるときが来るまで、ささやくような声で求められるSOSに気づくことができる距離で。この作品のタイトル、「ウィズ・ユー」、のように、どんなときも「ともに」という気持ちを抱きながら。

「たいせつなこと」とは

梶中学校 三年 山田 夏歌

むかついた。心がずっしりと重く感じる。優しそうに、でも悲しそうに村内先生が笑う。

私がこの本を読むのはこれで二回目だ。一回目の時、私には「たいせつなこと」が分からなかった。裏表紙には確かに書いてある。「本当にたいせつなことは何かを教えてください。物語。」と。それが分からなかった。気付かなかったから私にとってこの本はつまらない本になってしまった。

私がかもう一度読もうと思ったのにはきつかけがあった。私は相談されることが好きだ。その人が私に心の内を話す。そして、終わるとみんな曇った顔から清々した顔に変わっていく。その瞬間が好きだ。その日、私は相談されていた。ほつれた糸をほどこように。慎重に少しずつ話を聞く。時々励まし、共感し、肯定する。いつもと同じはずなのになぜかその人の顔は曇ったままだ。もつと、と焦らず根気強く聞く。急に話が途切れた。私を見つめる。表情ひとつ変えず私に言った。

「お世辞いらんから。」  
胸が痛む。私はとっさに「絶対違う。」と否定した。本当にお世辞ではない。たぶん。でも、その人は笑った。全てを見透かされてい

るようだった。怒ってはいなかった。でも悲しそうな笑顔だった。村内先生が浮かんできた。むかつく。心がずっしりと重くなる。衝動に駆られ本を探し、すぐに読み始めた。

村内先生とはこの本の主人公だ。教師なのに言葉がつかえてうまくしゃべれない。だから「たいせつなこと」しかしやべれない。ひとりぼっちの子に寄り添って「たいせつなこと」を教えて去っていく。本の中で村内先生は言う。

「本気で言ったことは、本気で聞かないとだめなんだ。」  
その言葉はすうっと入っていく。普通ならうっとうしく、煩わしく感じるはずなのに。ああ。そうなのだ。と分かる。私は本気で言っていることを本気で聞いていない。自分のために。自分が信頼されていると実感するためだけに聞いていたのだ。なんと情けないのか。またむかつく。村内先生、これが「たいせつなこと」ですか。答えは教えてくれないだろう。

この本にはひとりぼっちの子が何人か出てくる。その中でも特に篠沢さんという人に惹かれた。篠沢さんは教えてくれた。私たちはみんなアナゴだと。パイプにぎゅうぎゅうに詰まっっていて、身動きができないほど窮屈そ

うなアナゴ。でも、アナゴにとって常に何かに触れていることが一番快適で幸せなのだ。うだ。私たちも学校、会社、友達、たくさんのパイプの中にいる。私たちは幸せなのだろうか。必ず誰かと何かと繋がり合って、触れ合って生きている。そうでないといけないかのように。篠沢さんは学校というパイプを一人で抜け出す。学校が窮屈で息苦しいからだ。他の子はみんな内部進学するのに一人で別的高校へ行くのだ。すごいと思う。私には絶対にできないだろうから。私たちには二つの選択肢しかない。窮屈ではないが孤独なひとりぼっちかぎゅうぎゅう詰めのアナゴか。どちらも辛く、悲しい。私はぎゅうぎゅう詰めのアナゴだ。もし、ひとりぼっちの子がいたら私はどうするだろうか。パイプの中が窮屈で、それでいっぱいはいで何もできないだろうと思う。私はパイプから抜け出せない。嫌だ嫌だ嫌だ。またむかつく、村内先生これは「たいせつなこと」ですか。

私は人が本気で言ったことを本気で聞こうと思った。周りの景色が全く違うものになった。いつも明るく元気な人が実は人間関係に疲れていると分かった。みんなに頼りにされているのにどこか寂しそうな人もいた。その時はつとした。私は人を薄くしか見ていなか

った。私は見えるはずのものを見ていない。こんなにも周りがあるのに、自分のために相談を受けて見えるはずの本気に気付いていない。パイプがいっぱいいっぱいひたりぼつちに気付けない。「たいせつなこと」はそれだ。この本は、村内先生は本当に教えてくれた。村内先生はいつもと違って嬉しそうに笑ってくれるだろうか。「たいせつなこと」はすぐそばにある。幸せの青い鳥のように、それに気付いた時、重い心が軽くなる。村内先生は「ひとりぼっちじゃないし、ぎゅうぎゅう詰めのアナゴでもないんだなあ」と篠沢さんに言った。分からない。でも、一回目に読んだときよりも分かる。理屈でない理屈がすうっと流れ込む。成長したのだと、本気が分かるようになったのだと信じたい。村内先生は無力で無格好ながらもヒーローなのだ。必要とする人がきつという。私にも「たいせつなこと」を教え去ってしまってしまった。村内先生が笑う。私はもうむかつかない。